

第2回9月21日

演題：スポーツ活動からの離脱を規定する要因について

演者：竹之内隆志（体育科学部）

近年、生涯に渡ってスポーツ活動を実践していく生涯スポーツの重要性が指摘されている。スポーツ心理学の領域においても、スポーツ参加動機やスポーツの楽しさを規定する要因などが分析され、生涯スポーツの促進に寄与する研究がなされてきている。これらの研究はスポーツへの参加や継続の過程を取り扱っており、スポーツ参加に対するポジティブな要因を明らかにしているものと考えられる。

一方、コロキウムでは、スポーツ参加から離脱にいたるプロセスに着目し、離脱の規定要因というスポーツ参加を抑制するネガティブな要因について報告した。これは、スポーツ参加を促進する要因とスポーツ参加を抑制する要因の両方が明らかにされることによって、生涯スポーツのあり方がより理解されてくるものと考えられたからである。

研究を進めるにあたっては、まず、離脱行動の概念的検討がなされた。すなわち、離脱決定時にスポーツに対して嫌悪感を伴うかどうかという心理的側面から、嫌悪感を随伴する「スポーツ・ドロップアウト」と、随伴しない「スポーツ・トランスファー」の2つのタイプにスポーツ離脱行動が分類された。スポーツ・ドロップアウトは、スポーツ活動に対して嫌悪感をもっているため、離脱後のスポーツ参加は期待できない。一方、スポーツ・トランスファーは、スポーツそのものに対する嫌悪感はおらず、その後機会があればスポーツ参加が期待できるものと考えられた。

次に、離脱行動の発生機序を説明するための因果モデルが想定され、そのモデルの妥当性が検討された。すなわち、(1) 集団の競争性や配慮性という環境に対する認知と自己の能力の認知が相俟って、集団成員に対する対人感情に影響する、(2) この対人感情の良好度がスポーツ離脱行動に影響する、という因果関係が想定された。

中学校運動部員ならびに高校運動部員の2年生805名を対象として、上述の因果関係の妥当性がパス解析によって検討された。その結果、スポーツ・トランスファー感情は対人感情によって規定され、対人感情は集団の配慮性と競争性によって規定されていることが示された。また、スポーツ・ドロップアウト感情は、自己の能力の認知によって規定されていることが示された。これらの結果では、ほぼ仮定されたとおりの因果関係が示されており、本研究のモデルの妥当性が支持されたものと考えられた。

最後に、研究の結果をもとにスポーツ活動からの離脱の防止法について演者から提言がなされ、質疑応答がなされた。